

# コウノトリが導いてくれた

なかがい むねはる  
とみおか  
豊岡市長(兵庫県) 中貝宗治  
*Muneharu Nakagai*

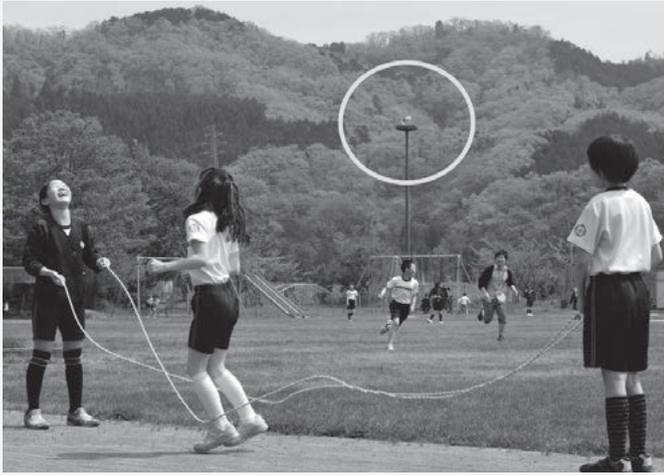


## ロシア・コウノトリの旅

私は、ずっとコウノトリを追いかけしてきました。

平成6年6月、当時兵庫県議会議員であった私は、野生のコウノトリを見たい一心で、シベリアに行きました。ハバロフスクからシベリア鉄道で17時間。ブラゴベシチェンスクに着きました。新聞記者、会社員など有志11人の7泊8日の旅でした。

ブラゴベシチェンスク教育大学・ワシリー教授の案内で、営巣地へ。見渡す限りの草原と湿地の中で、コウノトリは子育ての真っ最中でした。腰までの長靴をはき、このあたりの蚊は大群で襲うとヘラ鹿を失血



「校庭」

死させるほど強烈なので虫よけネットを頭からかぶり、服の上から防虫スプレーをたっぷり振りかけて、背中に食料と水、鍋とやかん、固形燃料を背負い、手にはもちろん、ビールと蓄冷材の入ったバッグをもって、そろりそろりと近づいていきます。巣から200mほど離れたところに荷物を下ろし、望遠鏡やカメラをセットして観察の開始です。

巣の中には、4羽のヒナと親鳥が1羽。交代で望遠鏡を覗きながら、「あ、ヒナが顔を出した!」「あー、引っ込んだ!」「あー、お尻を突き出した!」と騒がしい限りです。「じゃかましいわい!」と言ったかどうか、親鳥はかなり警戒しています。

草原には紫のアイリスや白いワタスゲの花がいたるところに咲いていて、時間は実にゆったりと流れていきます。ナベヅルのカップルも見えます。タンチョウやチョウゲンボウ、タゲリや地リスなどさまざまな生き物が住んでいて、自然は実に豊かに見えました。しかし、それでも、コウノトリの数はわずか3000羽程度と言われています。地平線まで続く草原と湿地。そのとてつもなく広大な自然が、かろうじてコウノトリを支えています。

## シベリアの自然・日本の自然

平成3年、兵庫県議会議員になった私は、初めてコウノトリと出会いました。



「いってらっしゃい」(1960年)

コウノトリは、羽を広げると2mもある白い大きな鳥です。かつては日本の各地にみられる鳥でした。しかし、鉄砲による乱獲や戦後の環境破壊によって数を減らし、昭和46年、日本の野生最後の1羽が豊岡で死んで、コウノトリは日本の空から消えました。

絶滅の前に保護活動が豊岡で起き、昭和40年、野生の鳥を捕まえて鳥かごに入れて人工飼育が始まりました。待望のヒナが生まれたのは、平成元年、人工飼育の開始から実に25年目の春のことでした。私が県議会議員になった平成3年には、20羽を超えるまでになっていました。幸い県当局への働き掛けが功を奏して、平成4年にコウノ



「いつてらっしゃい」(2006年)

これは対し、日本はモンスーン地帯にあつて、湿潤で、かつ暑い夏があります。光と水に恵まれることが光合成の条件ですから、草はあつと

トリの将来構想を策定する作業が始まり、野生復帰を目指すという方向性が打ち出されました。そうした中でシベリア・コウノトリの旅でした。コウノトリは完全肉食の大型の鳥で、豊かな自然がないと生息することはできません。シベリアの広大な自然と比べあまりに狭い日本の国土を思い浮かべて、私は半ば絶望的な気持ちになっていました。コウノトリの野生復帰など、夢のまた夢なのではないか？

しかし、考えてみると、シベリアの自然は過酷な自然です。植生も単調です。大森林地帯も、杉といえば杉ばかり、白樺といえは白樺ばかりが延々と続いています。それは傷つきやすい自然であつて、とてつもなく広いけれど浅い自然と言えます。

いう間に伸びてきます。さまざまな植物はさまざまな動物を支えます。日本の自然は、狭いけれど深い自然と言えます。日本の自然は、よみがえる底力を持つているはずです。だとすれば、日本で野生復帰の可能性はある、そう思い直して帰国の途についたのであります。

### コウノトリと共に暮らす

平成17年9月、コウノトリはついに野外に放たれました。最初の1羽が放されたとき、「やったあー」という大きな声がありました。それは、県議から転身し、市長として現場に立ち会っていた私の声でありました。

その2年後、平成19年5月、日本の野外で43年ぶりにヒナが誕生しました。以来野外で10年連続ヒナがかえり、今、約80羽のコウノトリが再び自由に空を飛んでいます。国境を越えて、韓国に飛んで行ったコウノトリもいます。コウノトリと共に暮らすために確立された、農業に頼らない「コウノトリ育む農法」のコメ作りは300haを超え、今や全国で大人気となっています。

私は、毎朝、約50分の道のりを歩いて市役所に通っています。通勤途上で、歩道の



「春の風景」

から突然カタカタカタという音がすることがあります。見上げると、電柱の上でコウノトリがくちばしを打ち鳴らしています。田んぼで代掻きをするトラクターの周りを歩くコウノトリを見かけることもあります。円山川の堤防の上を歩いていると、川の方からふわあつとコウノトリが舞い上がってきます。頭の上を越えていくこともあります。そんなとき、「今日は何かいことがありそう」という何とも言えない幸運な気持ちになります。豊かさとは何か。コウノトリに出会うと考えます。

野生のコウノトリを見る私の旅は、ロシア、中国、香港と続き、種は異なりますがヨーロッパのコウノトリを見るため、ドイツ、フランス、オーストリアと続けました。しかし今やその旅は、終着点・豊岡にたどり着いたのであります。